

上田博先生を悼む

ここ数年、國末泰平先生、安森敏隆先生と研究会でお世話になった先生方を相次いで失い、何ともいえない喪失感に襲われていたところが、ようやくお二人を失った寂しさに一つの区切りをつけたところに、上田博先生が亡くなられたという突然の訃報。大きな衝撃といまだにその事実を受け入れられず、時に茫然としておられます。私の雑然とした書齋のあちこちには、上田先生のご本はもちろん、先生と一緒に勉強させていただいた「芸林間歩の会」や「明治の森」、また鷗外の『小倉日記』の勉強会の資料などが散在しており、先生の文学に対する温かみとともに先生がまだ身近におられるような感じがして、いまでも気が付くとそこにぼつねんと座っていることがあります。

上田博先生とはじめてお会いしたのは、私が立命館大学文学部の二回生の夏だったかと記憶しております。先生は大阪電気通信高等学校（以下、電通高校）に勤務されながら、立命館大学の大学院博士課程に在籍されていて、「鳥影」や「我等の一团と彼」など、後に『啄木・小説の世界』（一九八〇年）にまとめられる

前芝憲一

論文を次々と発表されていた頃です。学部の先輩から院生に新進気鋭の啄木研究者がいるというので紹介され、広小路学舎の清心館地下の食堂でサマーランチを食べながら、いろいろな話をきかせていただきました。その頃の私は啄木や近代文学に対する知識も乏しく、ただ聞き役にまわっていて、友人の秦重雄君が鋭い問題意識で質問していたことを覚えています。その後、先生と再びお会いすることになったのは一九七七年のことです。私が立命館大学大学院の入試に失敗し、一年浪人することになった時、森本修先生から電通高校の非常勤講師の口を紹介され、上田博先生と同じ職場で働くという僥倖を得ました。

当時の電通高校国語科は、上田先生を中心に教科集団としてさまざまな取り組みをしておられました。もちろん個人の実践の自由は保障されており、一年間大岡昇平の『野火』をテキストに授業された先生もおられました。私は同じチームでしたが、半年足らずで挫折しました。また年度末には教科で文集を出されています。そこには生徒の作品の掲載から教員の創作、実践まとめや

定期考査の問題まで掲載され、次年度同じ問題は作れなかったですね。またお互いの問題を見ながらこれは知識偏重になっていないかなどと非常勤仲間をよく議論したものです。また年度末には教員同士の交流を図る教科旅行があり、小豆島や出石などに行きました。小豆島では上田先生の詩吟を初めて聴かせてもらい、意外な一面を見せていただきました。

私自身は、はじめて生徒を教えることに不安はありましたが、こうしたまわりの先生方の支えで何とかやっていました。しかし、授業の場は一人ですので、うまくいかないときも多くありました。やんちゃなクラスではなかなか話も聞いてもらえず、怒る・叱るばかりの授業でした。今思えば、一方的に知識を与えるだけの授業ですから、生徒も楽しくなかったでしょう。行き詰っていた時に、頼ったのは上田先生でした。先生の授業を見せていただいたのです。当時は、教員研修のための公開授業や授業見せあい運動などの概念もない頃でしたので、さすがに後輩の頼みとはいえ、はじめは渋っておりましたが、何とか頼み込んで見せていただきました。芥川龍之介の「羅生門」の授業でした。私も同じ学年担当だったので大いに参考になりました。構図化された板書に工夫された発問。生徒とのやりとりを通じて授業が展開されていきました。なにより上田先生独特のリズムがありました。「教える」というより「考えさせる」ことが軸でした。その後私が見研や高生研などの研究会で「発問」に取り組んでいったきっかけはここにあります。

このように私の国語教師の原点は、まさしくこの電通高校・上田博先生にあります。京都橘女子高等学校（当時）に勤務した後、教科旅行や年度末の総括などを通じて教科集団作りをはじめ、いろいろなモデルも電通高校にありました。また電通時代は、私にもいろいろお世話になりました。先生の枚方・渚の家にも邪魔させてもらったりしました。これも記憶は定かではありませんが、たしかご実家にも先生の運転される車に乗せていただき立ち寄らせてもらいました。上田先生の運転する車に乗せてもらったという人はそういないでしょう。

その後先生は、一九八〇年に橘女子大学に勤務され、続いて一九八三年には立命館大学に赴任されました。それから、啄木をはじめ石橋湛山や正宗白鳥、与謝野寛・晶子のご著書を次々と発表されていきました。一九八九年からは国際啄木学会の副会長・会長も歴任されました。上田先生とお会いできる機会はめっきり少なくなりましたが、こんな多忙な中でも先生は「言語・文学の会」にはよく顔を出され、一年に一回は発表もしていただきました。

「言語・文学の会」は、上田先生や安森先生、國末先生らを中心とした立命館大学大学院の卒業生により構成され、自主的に運営されてきた組織です。時には、和田繁二郎先生・國崎望久太郎先生をお招きして、さまざまなご教示をいただきました。小さな会ですが、一九七二年四月に第一回例会が開かれ、その後二〇年以上続けられました。私が、この会にはじめて参加したのは、一

九七八年の十二月だったかと思えます。そして、会の一〇〇回を記念して、これまで積み重ねてきたものを本としてまとめたのが、一九九二年に刊行された『日本文学と人間の発見』（世界思想社）です。これを見ると、和田繁二郎先生をはじめとして、上田先生の啄木論あり、國末先生の芥川論、安森先生の斎藤茂吉論、堀竹忠晃先生の平家物語論、宮岡薫先生の古代歌謡論、長田久男先生・姜斗興先生の言語論などと、一〇〇回の発表者の壮観ぶりに改めて驚きます。この会の中心が上田先生と國末先生でした。

ここでは、発表した後、先生方の新しい切り口・視点からのアドバイスを受けるのが本当に楽しみでもあり、大いなる刺激でもありました。また言語・文学の会では、ときどき文学旅行に出ました。金沢や姫路などいろいろなところに行きました。小浜に行ったときは、水上勉の若州一滴文庫や山川登美子の生家を訪れ、そこで和田繁二郎先生や上田先生の貴重なお話を聴くことができました。伊良湖岬ではみんなでサイクリングをしました。私と國末先生は当時ヘビースモーカーでしたので、坂の途中で息切れがし、上田先生や和田先生に追い抜かれたことなどを鮮明に思い出します。

上田博先生のご学問や研究成果、文学活動の評価などは、私には荷が重すぎるところです。瀧本和成先生をはじめとした研究者のみなさまに委ねたいと思います。また歌人としての上田博もぜひ歌人の方々に語っていただきたいものです。ただ一言いわせて

いただくと、先生は研究活動のはじめから、文学作品を狭い活字の解釈の世界に押し込めることなく、当時の社会や人間の中から作品の本質をつかもうとされていたということです。そもそも『啄木 小説の世界』が学会から高く評価されたのも、先生の社会性をもった眼にあつたと言つていいでしょう。先生はよく閉鎖的な研究集団を「なになに業界」「なになに産業」と厳しく批判されてきました。それは文学作品・作家を一部の人間たちの独占とするのではなく、もつと広く、言うなら文学を愛する人たちに開放しようとする立場からの発言だったと思います。またそれは、文学を過去のものと位置づけるのではなく、現代に立つものとしてとらえようとする立場からのものでもありました。またその中で「生活者」としての視点をいつも大事にされてきました。そして先生には何よりも文学やその対象に対する深い愛がありました。そういう上田先生のお人柄や生き方、考え方がよくあらわれているのが、「祝祭の人 坪内逍遙」（二〇一二年・明治の森社）であると、私は位置づけています。

最後に上田博先生が「芸林間歩」（創刊号）で述べられた言葉を紹介します。

この会（芸林間歩の会）は、皮相な現実のエセ文化（文芸）に流されることなく、人間の真に憧憬するべき社会や人間世界を探求すべく、ものごとの源流に目を向けてゆくことを大切にしたいと思います。

私はこれからも先生のこのお言葉を忘れず文学を愛していきたく

と思います。

(この文章は、私の回想の中の上田博先生について述べたものです。一部記憶違いなどあるかと思いますが、ご海容ください。)

(まえしば・けんいち 本学非常勤講師)